

日本銀行旧函館支店

中村茂樹 日本銀行文書局技師

幕末に、横浜、長崎などとともに国際貿易港として開港し、北海道の玄関口としても栄えてきた函館は、明治以降幾度かの大きな火災を被り、その度に街並みを大きく変えています。函館出張所・支店も度重なる大火の影響を大きく受けています。第八回は、そんな函館市に残る旧函館支店の建物を紹介します。

函館出張所の開設

松前藩の蝦夷地交易港として開かれた箱館（現在の函館）は、幕末に天領地となり、安政六年（一八五九）に国際貿易港として開港します。

明治期に入り、北海道開発の玄関口として、さらに北洋漁業の拠点として、函館港の重要性はますます高まり、日本有数の港湾都市として急速な発展を遂げます。

大正九年（一九二〇）の国勢調査で人口を比較すると、函館市の一四万四七四〇人に對し、小樽市が一〇万八一一三人、札幌市が一〇万二五七一人、さらに仙台市が一、一八、九七八人と、函館が道内のみならず北日本最大の都

市であったことがわかります。

明治十五年（一八八二）十月の日本銀行開業後も、北海道においては、明治新政府による北海道開発に伴う国庫金取り扱いなどは、代理店契約のもと先に進出した旧三井銀行に委託していました。

日本銀行は、北海道開発の拡大とともに、北海道の金融をより円滑にするため、旧三井銀行の官金取扱業務の三カ所に出張所を設置して同業務を日本銀行が直接扱うこととなります。このうち函館では、市内末広町の旧三井銀行支店の建物を購入し、明治二十六年（一八九三）四月に初代の函館出張所を開設しました。（写真1・図1）



上・旧函館支店（現北方民族資料館）の現在の外観
下・新築時の外観



日本銀行のなかで、大阪支店に次いで二番目に古い地方拠点です。

同出張所は明治二十八年（一八九五）七月、北海道の玄関口と北洋漁業の中心地として、北海道支店に昇格するものの、その後の小樽の著しい発展に伴い、明治三十九年（一九〇六）八月、小樽出張所の支店昇格と交代で再び出張所に戻りました。

明治四十年（一九〇七）八月二十五日、市内東川町の住宅密集地から出火し、折からの強風にあおられた火災は、市西部のほぼすべてに燃え広がります。この大火による罹災面積は四〇万余坪、焼失家屋は一萬二千戸となり、初代函館出張所建物も類焼を免れず焼失します。



写真1
初代函館出張所の外観（日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵）

（注）辰野善吾
明治十二年（一八七九）工部大学校（現在の東京大学工学部）造家（建築）学科を第一回生として卒業。近代日本建築界の先覚者。日本銀行建築顧問。日本銀行本店本館のほか、東京駅など明治大正期の日本を代表する建築を数多く手掛けた。

図1 歴代函館支店の所在地



黄色部分は「重要伝統的建造物群保存地区」を示す
(注) 初代出張所・2代目支店とも同位置

図2 2代目函館支店の平面図



一方、手狭な初代建物については、かねてから建て替え計画があり、早い段階で、豊川町に移転用地を購入していました。その後、立地条件等から初代建物の建つ末広町での現地建て替え計画に方針を変更し、隣接敷地の購入と豊川町敷地の用途変更を進めていたところでした。

そのような動きの中で火災焼失となったため、豊川町の空き所有地に急ぎ仮営業所を設置しつつ、焼失した初代建物の跡地に新たな営業所建物の建築計画が始まります。

二代目の函館支店建物

二代目の設計は、辰野金吾(注1)と

長野宇平治(注2)に委ねられ、さらに大学を卒業したばかりの奥村精一郎(注3)が加わります。

明治四十三年(一九一〇)六月に着工した工事は、九万円の工費を費やし、明治四十四年(一九一二年)十月に完成しました。

同じ頃、明治四十年(一九〇七)の大火により焼失した建物が一斉に再建されました。支店近くの基坂の坂上に現存する旧函館区公会堂(注4)、旧函館支庁舎(注5)もこの時期に建設されたものです。

実質的に支店業務を行っていた出張所は、明治四十四年(一九一二年)五月、二代目建物の完成前に、再び函館支店に改称されます。

二代目の函館支店は、木造二階建ての



写真2 2代目函館支店の外観



写真3 基坂から見る2代目函館支店

本館と、レンガ造り平屋建ての金庫、木造平屋建ての食堂・宿直室等の付属家と北側塀沿いのレンガ造り倉庫で構成されています。(図2)

本館は、木造堅瓦張下地(注6)漆喰塗りの外壁に、スレート葺きの屋根にドーム屋根とドーマ窓(注7)を配した古典様式の建物です。(写真2・3)

日本銀行で初めての寒冷地建築となる建物は、防寒用に窓サッシを二重にし、屋根の積雪対策にも工夫が施されました。

しかし、二代目の函館支店建物も予想以上の短い運命を強いられることになります。

大正十三年(一九二四)八月二十七日の早朝、東隣の東浜町から発生した火災で本館建物が類焼しました。宿直職員の奮闘により、金庫と付属家が延焼をまぬがれ、銀行券、帳簿類が無事

(注2) 長野宇平治
明治二十六年(一八九三)帝国大学工科大学(現在の東京大学工学部)造家(建築)学科を卒業。日本銀行技師長。わが国屈指の古典主義建築家として知られ、日本銀行本支店をはじめとする数多くの銀行建築を手掛けた。

(注3) 奥村精一郎
明治四十二年(一九〇九)東京帝国大学工科大学(現在の東京大学工学部)造家(建築)学科を卒業。日本銀行技師。日本銀行旧函館支店、日本銀行旧福島支店の設計に携わる。

(注4) 旧函館区公会堂
明治四十年(一九〇七)の大火により、町会所が焼失した後、新たな集会所および商業会議所事務所として建築。明治四十三年(一九一〇)完成。国の重要文化財。

(注5) 旧函館支庁舎
明治四十年(一九〇七)の大火により焼失し建て直したものの、明治四十二年(一九〇九)に完成。元町公園内に建つ。前面の柱廊玄関のエンタンス風(中央部に膨らみのある)の柱が特徴。北海道有形文化財に指定。

(注6) 堅瓦張下地
幕末から昭和初期に多く用いられた、木造建物の外壁左官仕上げの下地工法。木ずり(小幅板をすき間をあけて張った下地)の上に平瓦を釘で留め、モルタルで中塗りしたもの。現在はラス下地(金属製の金網を張った下地)工法が主流。

(注7) ドーマ窓
西洋建築における屋根裏や吹き抜けへの明かり採りや外気導入を目的とした窓。



写真4
大火で類焼する2代目函館支店
(日本銀行金融研究所アーカイブ
所蔵)



写真5 3代目函館支店の外観(新築時)

三代目の函館支店建物

三代目の設計は日本銀行技手の平松浅一が携わり、元日本銀行技師で建築界の長老である葛西萬司(注9)に設計

画が始まります。そして、再び新たな営業所建物の計画が始まります。一方、大火による街区改正により、末広町周辺の道路を拡幅することになり、営業所敷地の道路側幅二間分を函館市に売却することになります。

であったことが不幸中の幸いで、休業することなく付属家を利用して当日の営業を行いました。(写真4)

その後、旧第一銀行支店で空き家になっていた建物を借用して仮営業を開始する一方、本店から平松浅一(注8)技手が現地向かい、延焼をまぬがれた金庫の前に仮営業場を設けることにより支店を仮復旧しました。

一方、大火による街区改正により、末広町周辺の道路を拡幅することになり、営業所敷地の道路側幅二間分を函館市に売却することになります。

そして、再び新たな営業所建物の計画が始まります。

画が始まります。

監修を委ねました。

工事は、敷地内のレンガ造り金庫と倉庫以外の残存木造付属家を売却処分した後、大正十四年(一九二五)八月に着工し、同十五年(一九二六)十二月に完成しました。

三代目の函館支店の建物は、鉄筋コンクリート造り三階建ての本館と同二階建ての付属家、および既存のレンガ造り平屋建ての金庫および倉庫で構成され、本館、付属家は既存金庫と渡り廊下で接続されています。(図3)

本館は、人造花崗石貼りの外壁の二階上部にコーニス(注10)を付し、ペディメント(注11)を冠した正面玄関の両側に丸柱の列柱とアーチ窓を配し、更に上部バルコニーに壺飾り(注12)装飾石を設けるなど、古典様式のデザインが施されています。(写真5)

また、渡り廊下を含む新築建造物の内外装はすべて不燃材とし、扉や窓等の建具もすべて鉄製とするなど、防火対策を徹底しました。(写真6)

外観を変えた増改築工事

その後、二代目から使用したレンガ造りの金庫が構造・設備とも著しく老朽化したことに加え、戦後の事務量の激増により、営業事務室・金庫とも著



写真6 3代目函館支店の営業場(新築時)
(日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)

しく手狭となったため、増改築することになります。

既存敷地に増築余地がないことから、先行して昭和二十三年(一九四八)に東側隣地を購入し、昭和二十八年(一九五三)四月に鉄骨鉄筋コンクリート造り三階・地下一階建ての新館の増築に着手しました。

次いで、レンガ造り金庫の取り壊しと、本館の改築および付属家の増改築を行い、一年半の工期をかけて昭和二十九年(一九五四)十二月に完成しました。(図4)

また、増改築工事に合わせ、外装劣化の進捗が著しい本館の外装改修も行われました。

外装石は凍害による損傷が著しいため、円柱やコーニス等の装飾部分を含むすべてを取り除き、腐食の著しい窓

(注8) 平松浅一

日本銀行技手。大正期、長野宇平治等多くの技師が日本銀行を退職した後も文書局に残り、日本銀行本支店建物の設計を手掛ける。旧松江支店(初代)、旧函館支店(三代目)等を設計。

(注9) 葛西萬司

明治二十三年(一九〇)帝国大学工科大学(現在の東京大学工学部)造家(建築)学科を卒業。日本銀行技師として本店本館、西部支店に携わった後、辰野金吾と辰野葛西建築設計事務所を共同経営。旧盛岡銀行本店本館、東京駅等を設計。

(注10) コーニス

西洋建築の外壁頂部や、屋根の下などに付される水平の細長い突出部。蛇腹。

(注11) ペディメント

西洋建築の切り妻屋根における妻側屋根下部と水平材に囲まれた三角形の部分。

(注12) 壺飾り

西洋建築における屋根やバルコニー手すり等に設ける壺状の飾り。

(注13) 石川啄木資料館

函館市文学館の二階に開設。函館市にゆかりのある石川啄木関連の資料を収蔵・展示。

(注14) 函館市北方民族資料館

市立博物館旧蔵資料のほか、函館出身の馬場橋、見玉作左衛門両氏のコレクションを収蔵・展示。馬場コレクションは国の重要有形民俗文化財に指定。

(注15) 開拓使函館支庁仮博物場

明治十二年(一八七九)五月に開場。木造平屋建て。開拓史の米国人顧問ホール・ケブロンが博物館と図書館の設立を提言し整備さ

図4 増築後の3代目函館支店の平面図

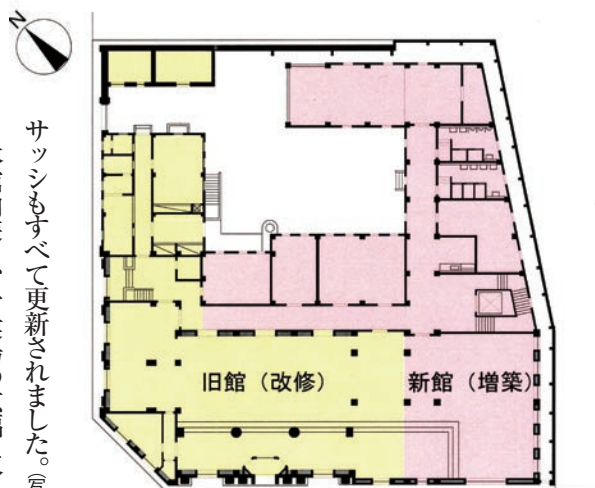
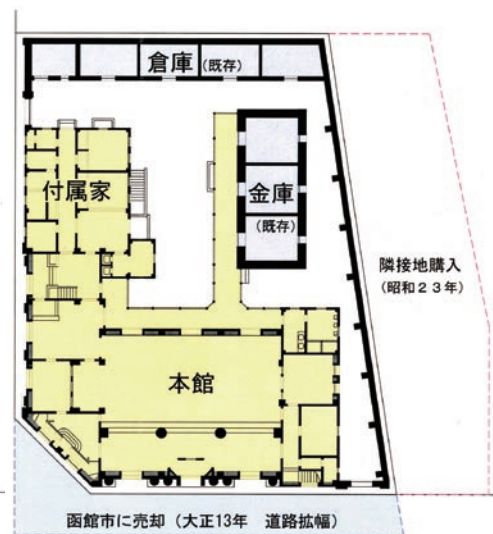


図3 新築時の3代目函館支店の平面図



サッシもすべて更新されました。(写真7)
 本館内装も、営業場の拡幅に合わせて大幅な模様替えを余儀なくされます。
 増改築工事により本館外観が一変した現在、大正末期の歴史的建物としてはあまりにも平坦でおとなしい外観に戸惑いを受けるのもやむを得ません。
 新築時の外観が保存されていればと悔やまれます。

北方民族資料館としての保存・活用

さらに、業務の更なる拡大と建物設備の老朽化とともに、東部に移動する市街地の流れに対応して、市の中心地に適地を求めて移転することになり、新築用地として東雲町の旧函館郵便局の跡地を購入し、昭和六十三年(一九八八)十月に現在の四代目函館支店に新築移転しました。(写真8)

一方、三代目の旧支店建物は函館市の所有となり、平成元年(一九八九)十一月に函館市北方民族資料館と石川啄木資料館の併設館が建物の一階と二階に分けて開館しました。

その後、平成五年(一九九三)に旧第一銀行函館支店の建物を利用して開館した函館市文学館に石川啄木資料館



写真7 3代目函館支店の外観(増改築後)
 (日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵)

(注13) が移転することとなり、全館を函館市北方民族資料館(注14)として再開館しました。(写真9)

同資料館は、日本で一番古い博物館のひとつである開拓使函館支庁仮博物館(注15)からの旧蔵資料を含む希少なアイヌ民族資料を数多く所蔵して、世界的に注目を集めています。

函館山の麓(注16)に広がる元町、末広町を始めとする西部地区は、国際貿易港の外国人居留地としての文化を強く残し、また大正・昭和初期の数多くの文化財建物が現存して、平成元年(一九八九)四月に重要伝統的建造物群保存地区(注16)に選定されています。

市街の中心が駅前中央地区と五稜郭のある東部地区に移動し、さらに北東方面に居住地が伸びている現在、同地区に残る建物の多くが博物館、資料館として活用され、有力な観光資源となっています。

これからも、旧函館支店建物が函館の歴史を伝える建物として保存・活用されることを期待します。



写真8 現在の函館支店(4代目)

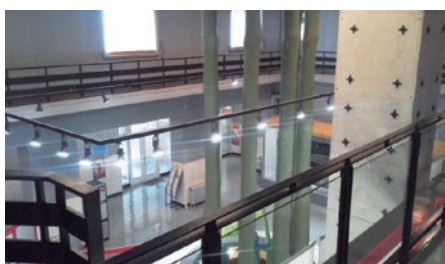


写真9 函館市北方民族資料館の内部

れた。日本最古の地方博物館。

(注16) 重要伝統的建造物群保存地区
 文化財保護法に規定する文化財種別のひとつ。伝統的建造物群およびこれと一体をなして歴史的風致を形成している環境を保存するために、特に価値が高いとして国が選定する地区。現在一〇四地区が選定。(図1)